

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370388

研究課題名(和文) 想起する帝国 ナチス・ドイツにおいて想起された「過去」の研究

研究課題名(英文) The Reich of the Memories: Studies on the Collective Memory in the Nazi Germany

研究代表者

溝井 裕一 (Mizoi, Yuichi)

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：60551322

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：我々は、ナチスによる集合的記憶の乱用の問題について調査を実施した。その結果、ナチスが過去の「アーリア人の遺産」に由来する要素を、建築、祝祭、演説などに織り込み、これによってドイツ人のアイデンティティを変化させ、彼らに人種主義的かつ優生学的な思想を植え付けようとしたことが明らかとなった。ナチスが実施した絶滅動物の復元も、「過去の想起」に関連するものであった。我々はまた、戦後の大衆文化における「集合的記憶におけるナチスのイメージ」も研究対象とした。そして、ナチスのイメージは現実というよりも我々の期待を反映したものにすぎず、世代交代や社会環境の変化に合わせて変質していくものであることを解明した。

研究成果の概要(英文)：Our investigations were focused on the Nazis' abuse of the collective memory. They wove elements from the "glorious heritage of the Aryans" into their cultural products like architectures, feasts, texts of speeches, etc. In this way they intended to transform the nation's identity and instill racist minds in the masses. The project for reviving the extinct animals was also related to their practice of remembering the Aryan age, which was an amalgam of the elements from different cultures developed by supposed ancestors like ancient Greeks. In addition to "the collective memory in the Third Reich", "the collective memory about the Nazis" in the post-war period was a subject of our considerations. The representations of the Nazis in the modern mass-culture indicate that their images are not always based on the Nazis in reality, but merely the reconstructions that reflect our expectations and transform in accordance with the changes of generations or social circumstances.

研究分野：西洋文化史

キーワード：集合的記憶 ナチス モーリス・アルヴァックス アライダ・アスマン ルッツ・ヘック ヴィクトール・クレンペラー アルベルト・シュペーア リヒャルト・ワーグナー

1. 研究開始当初の背景

モーリス・アルヴァックスによって創始された集合的記憶論は、共同体における「思い出」が、必ずしも過去の事実を反映したものではなく、再構成されたものであると同時に、現在の集団のアイデンティティを保証し、さらに未来におけるふるまいを決定するのに重要な役割を果たすとする。我々は、このメカニズムをナチス・ドイツにあてはめ、「集合的記憶」が当時どのような役割を果たしたかを解明しようとした。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、ナチスがいかに過去の「思い出」を利用し、大衆操作を図っていたかを明らかにせんとするものである。具体的には、文化的プロジェクトを通して、ナチスがドイツ人の知らぬ間に新しい「記憶」を刷り込もうとした過程を調査した。

(2) しかしながら、研究の進展にともない、ナチス・ドイツ時代の集合的記憶の問題を扱うだけでなく、戦後、ナチスそのものが「集合的記憶」のなかでどのように表象されてきたかも調査すべきであると考えられたため、文学や映画におけるナチスのイメージについても研究がなされた。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者(溝井)は、ナチス・ドイツ時代の建築、絶滅動物復元計画、シンボル、研究分担者(齊藤、細川)は戦後のナチス映画ならびに記念碑、研究協力者(浜本、森、北川)はナチスの祝祭、戦後のナチス映画、ワーグナー音楽について資料を収集するとともに、これを「集合的記憶論」にあてはめつつ考察をおこなった。

(2) なお研究分担者(細川)は、社会言語学の立場からナチス時代の新聞の統語構造を分析したほか、キリスト教的な語彙の使用について調査し、ナチスが人々の意識しないままにヒトラー崇拜を植え付けようとした問題に関しても考察している。

4. 研究成果

(1) 研究代表者(溝井)は、第三帝国におけるさまざまな建築、すなわち帝国スポーツ上、ニュルンベルク建築群、帝国首都ゲルマニア、ヴェーヴェルスブルク城などをとりあげ、それらのなかに、いかに「過去のイメージ」がとりこまれていったかを調査した。その過程で明らかとなったのは、ナチスが参照した「過去のイメージ」は概ねヒトラーらの好んだ「ギリシア・ローマ文化」と、ヒトラーらの好んだ「ゲルマン文化」に分かれることである。当時、ギリシア人、ローマ人、ゲルマン人はいずれも「アーリア人」の概念の

もとに一括りにされていたことが、そうした曖昧な態度を許したのである。

溝井は、Chapoutot (2014) や田野 (2009) の研究を踏まえつつ、ヒトラーが古代ギリシア・ローマをイメージさせる建築を好んだのは、ギリシアの合理主義や、ローマの征服活動ならびに文化政策をドイツ人に浸透させようとしたためであると結論した。この様式を代表するのはオリンピックスタジアムやベルリン建築群であるが、一方でヒムラーが改築したヴェーヴェルスブルク城にも着目し、これが古代ゲルマン文化を想起させ、親衛隊のアイデンティティ形成のために利用された事実を明らかにしている。

また溝井は、ナチスが推進した絶滅動物復元計画と、その文化的背景について調査をおこなった。そして、ナチスが復元ないし再繁殖しようとした動物、すなわちオーロックス、ターパン、ヨーロッパバイソンはいずれも中世叙事詩『ニーベルンゲンの歌』と関連が深いことを明らかにした。当時この作品は、ドイツ的世界を表象する叙事詩としてみなされていたことから、復元計画は、「ニーベルンゲンの環境」の再構築に関わるものであったと結論される。また、復元計画を支えた理論が、ヒトラーの人種論と交錯することも指摘している。

このほか、アルヴァックスやアスマンの論を取り入れつつ、「記憶の場」としてハーケンクロイツが有していた意味や、ヒトラーの歴史認識の問題についても考察を行っている。

(2) 研究分担者(細川)は、まず、ナチスによる「権力掌握」を報じた新聞の言語を統計的に調査することによって、クレンペラー(1947)が指摘した「第三帝国の言語」の特徴のうち、キリスト教のことばとの類似性と話しことばらしさを明らかにした。キリスト教的な語彙についてはDube (2004)による分類に、話しことばらしさについてはÁgel/Hennig (2006)に基づきながら分析をおこなった。その結果、ナチスの機関紙は、わずかな差ではあるが同時代の新聞よりも話しことば的で簡明なことばを用いていたことが明らかになった。また、ヒトラーの演説と同様に、キリスト教的な語彙を用いてナチズム運動を神格化しようとしていたことも確かめられた。しかも、彼らがとくに好んで用いたのは、直接的にキリスト教を想起させるものではなく、すでに世俗化したもの、一見、キリスト教的な要素がないと思われることばだった。

つぎに、現在の大衆文化におけるヒトラーおよびナチス受容を明らかにするために、ヴェルメシュの『帰ってきたヒトラー』(2012)およびその映画版の受容を分析し、以下のことを明らかにした。まず、同作における笑いは、現代のドイツにヒトラー・ネタがあふれているという状況にもとづくものが多いこと。そして、そうした状況が生まれた背景に

は、ヒトラー自身がヴィジュアル的にも「大衆扇動家」というキャラクターとしても想起しやすい存在であること、さらに、政治的な理由から多くのナチス戦犯が潜伏に成功して戦後を生きぬいたことから、ナチスが「帰ってくる」存在として想起しやすいことが挙げられる。さらには、ナチスそのものが、「セクシー」な軍人から特撮ヒーローものに出てくる怪人まで、さまざまなかたちで大衆文化に根づいていた、という土壌もあった。

(3) 研究分担者(齊藤)は、現代ドイツにおけるヒトラーイメージについて取り上げ、特に近年のドイツ映画のなかでヒトラーを「悪」として描くのではなく、より人間らしく、または笑いの対象として描写されている問題を調査した。

映画『ヒトラー 最期の12日間』はヒトラー元秘書の手記及び最新の調査をもとに製作されたが、ヒトラーの人間としての弱さなどを描写したことが批判された。本研究ではこれに対し、戦後60年が経過する中で、過去へ対峙する姿勢を変えようとする現在の世代の意思が関係した結果であると指摘した。この世代の意思について、ナチス時代やヒトラー像を当時の人々が感じたままに描写しようとする試みを査証として、現代ドイツ人は過去を反省の対象であると一元的に見做すのではなく、多面的に追体験しようとしていると指摘した。

また、こうした動きはドイツ映画にのみ指摘できる現象ではなく、ハンブルクの対抗的記念碑やベルリンのユダヤ人追悼記念碑に代表されるように、ナチス犯罪を想起させるものでありながら、それに向き合う姿勢を訪問者に一任するような記念碑の中にも認められるとした。

加えて、特に映画などのマスメディアで人間的ヒトラー像が再生される背景には、消費者ニーズと市場という経済システムも考慮すべきであることを、ルーマンのマスメディアシステム理論を援用しながら明らかにした。現代ドイツにおける以上のような動きはヒトラーの「脱悪魔化」という文脈で語られるが、それはヒトラーの悪魔性を隠すことではなく、一人の人間が悪魔的ともいえる蛮行を引き起こすことを改めて自覚する契機であるとすべきであると結論した。

(4) 研究協力者(浜本)は、ナチスがドイツ伝統社会に根差してきた祝祭を感動的に演出することによって、団結した「民族共同体」をつくりだそうとした問題を調査した。ナチスが重視した祝祭には、冬至祭、夏至祭、5月祭、秋の収穫感謝祭などがあったが、中世以降キリスト教化されていても、これらは本来ゲルマン文化に由来するものとみなされた。そこでヒムラー、ローゼンベルク、ライといったナチス首脳たちの主導のもとで、ドイツ国民をキリスト教からゲルマン崇拜

へ転換するための道具として利用されたのである。また、ナチスが制服に取り入れた茶色が、収穫祭において重要な「大地」を想起させるものであったことなど、シンボルカラーにも着目している。

さらに、ナチス党大会において重要な役割を果たした「血染めの旗」が、武装蜂起の際に倒れた党員の精神を想起させるものとして死者崇拜に使用されたことや、ニュルンベルクの党大会で熱狂をもたらした演出についても考察をおこない、祝祭における「過去」の演出が、国民アイデンティティの変容と操作に関わっていた事実を明らかにした。

(5) 研究協力者(森)は、フィンランドの『アイアン・スカイ』(2012)に焦点を当て、そこで描かれるナチス像を分析した。そしてこの作品には戦後のヒトラーやナチスをめぐる思想の動向のみならず、同時代の文化的記号やコードが多く含まれていると結論している。この映画は、月に亡命していたナチスが現代の地球を攻撃するという内容だが、そこには例えば『チャップリンの独裁者』(1940)や『ヒトラー 最期の12日間』(2005)の有名な場面や、ロバート・A・ハインラインの『宇宙船ガリレオ号』(1992)のストーリーが取り込まれている。また、「帰ってきたナチス」のテーマは、実際に「逃亡ナチス」が南米などに身を潜めていた事実と関係が深いことも指摘し、『アイアン・スカイ』が事実上、虚像、実像を含むナチスにまつわる集合的記憶の集積であることを明らかにした。

さらに、この作品がドイツと同盟してソ連と戦ったフィンランドの苦い記憶とも関わっており、これを風刺するものでもあったことを指摘している。

(6) 研究協力者(北川)は、ワーグナーのオペラとナチスとの関係を調査した。その方向性は2つあり、1つ目は、ナチス時代におけるワーグナーオペラの受容である。ヒトラーが、扇情的で陶酔をもたらすワーグナー音楽に熱狂し、ドイツ性を表現するものと考えていたことは周知の事実だが、その思想は「パイロイト・サークル」と呼ばれる、ワーグナー信奉者の集団と交流することで深められた。そして北川は、政権獲得後、パイロイト音楽祭が「アドルフ・ヒトラー音楽祭」と化し、権力誇示の場、政治的演出の場として機能するようになっていったこと、戦争勃発後は、パイロイト音楽祭はドイツ人の戦闘的気質や優越性を想起させるものとして利用されたことを明らかにした。

2つ目は、戦後社会におけるワーグナー音楽の受容である。ゲッベルスは、「ワーグナー、ヒトラー、ナチス」という結びつきを強調したが、これがドイツ人の集合的記憶に刻み込まれた結果、今もなお深刻な影響を及ぼしている。ヒトラーがワーグナーを好んだこと、

ワグナー自身も反ユダヤ的な文章を書いていたことは、1960年代以降強調されるようになり、ワグナー作品がナチスの世界観を先取りにしたものという解釈も登場した。しかし近年、「ワグナー＝ナチス」の図式を安易に受け入れることを見直す動きも活発となっていることから、「集合的記憶」におけるワグナーのイメージが、歴史とともに変容するものであると結論した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

細川裕史、ドイツ語圏における政治的カトリック系新聞の誕生と発展、阪南論集 人文・自然科学編、査読無、Vol. 50、No. 2、2015、11-20

細川裕史、ナチズムの言語をめぐる言語意識：V.Klempererの『第三帝国の言語』(1947)に基づく一考察、研究論集、査読無、Vol. 18、2014、65-84

〔学会発表〕(計2件)

溝井裕一、想起する帝国 ナチス・ドイツにおける「過去のイメージ」の乱用に関する考察、東西学術研究所第14回研究例会、2016年2月26日、関西大学(大阪)

細川裕史、新聞における「第三帝国の言語」キリスト教との類似性および話ことば性の観点から、京都ドイツ語学研究会、2015年12月12日、京都大学(京都)

齊藤公輔、集合的記憶のメディアとしての『ヒトラー 最期の12日間』、日本独文学会東海支部、2015年7月12日、名古屋大学(愛知)

溝井裕一、細川裕史、齊藤公輔、想起する帝国 ナチス・ドイツにおける「集合的記憶」に関する考察、日本独文学会、2014年10月11日、京都府立大学(京都)

〔図書〕(計4件)

溝井裕一(共編著)、細川裕史(共編著)、齊藤公輔(共編著)、浜本隆志、森貴史、北川千香子、勉誠出版、想起する帝国 ナチス・ドイツ「記憶」の文化史(仮題)、2016(予定)、320程度

浜本隆志(編)、溝井裕一、細川裕史、森貴史、柏木治、高田博行、浜本隆三、明石書店、欧米社会の集団妄想とカルト症候群 少年十字軍、千年王国、魔女狩り、KKK、人種主義の生成と連鎖、2015、400

溝井裕一、細川裕史、森貴史、関西大学出版部、ドイツ奇人街道、2014、331

溝井裕一、勉誠出版、動物園の文化史 ひとと動物の5000年、2014、311

6. 研究組織

(1)研究代表者

溝井 裕一(MIZOI, Yuichi)
関西大学・文学部・准教授
研究者番号：60551322

(2)研究分担者

細川 裕史(HOSOKAWA, Hirofumi)
阪南大学・経済学部・准教授
研究者番号：60637370

(3)研究分担者

齊藤 公輔(SAITO, Kosuke)
中京大学・国際教養学部・准教授
研究者番号：90532648

(4)研究協力者

浜本 隆志(HAMAMOTO, Takashi)
関西大学・文学部・名誉教授

森 貴史(MORI, Takashi)
関西大学・文学部・教授

北川 千香子(KITAGAWA, Chikako)
慶應義塾大学・商学部・専任講師